





下中さんの朗読風景

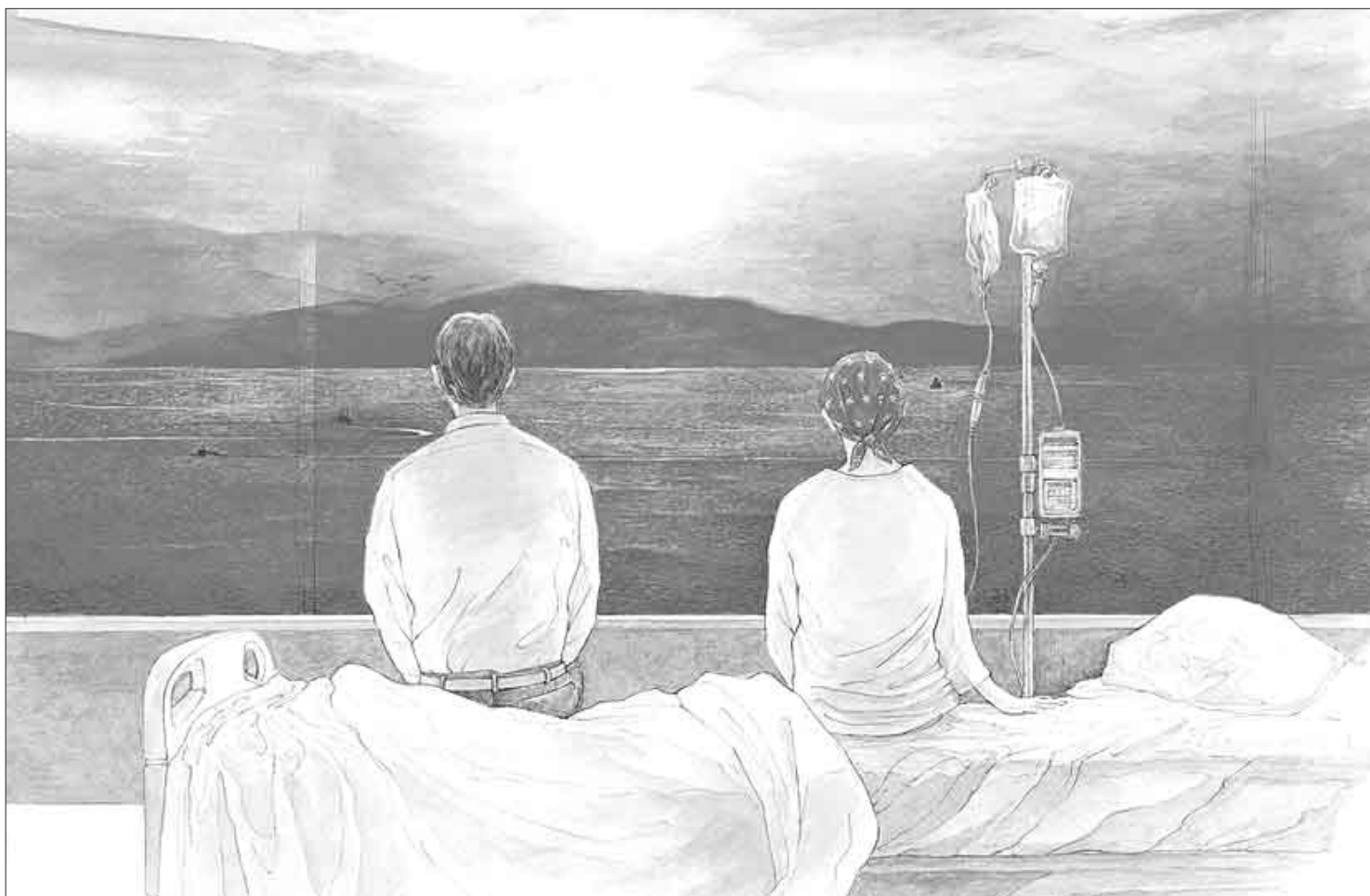
平成二四年度から二八年度の「がん対策推進基本計画」では、新たに「子どもに対するがん教育の在り方を検討し、健康教育の中でがん教育を推進する」というのが加わったとの説明があった。核家族化の進展で、生活のなかでごく自然に学ぶ機会の減少している昨今なこと、非常に重要なことと思える。

第二部の基調講演は、在宅医として著名な関本クリニック院長・関本雅子さんの「あなたは、人生の最期をどこで迎えますか？」で、豊富な経験に基づいた非常に分かりやすい明快な講演であった。絵本「いびらのすむ家」が実話で、その印象・感情が脳裡に鮮明に残されているうちに、医療者サイドからの論理的な展開で分かり易い講演を聞くことができたのは効果的だった。

「いびら」とは何を意味するのか？朗読を聴いて正解者三名には記念品を贈るとして用意されていたが、会場への参加者のほとんどはその正解を見つけているように見受けられたにもかかわらず、会場にて大きな声で口に出して発表することにはためらいが生じたようで、結果として記念品の受け取り者はゼロであった。さて「いびら」が何かわからない方々は、ぜひ、絵本を手にして正解を見つけていただきたい。

教材としてDVDが完成したのでそれを記念しての朗読会で、朗読は、下中恵子さん（語りすとことのは主宰）である。下中さんのダイナミックで繊細そして豊かな感情あふれる表現に会場は静まりかえり、涙を浮かべる参加者が多かった。絵本を通して家での看取りの現実の一部が理解できたが、国民の二人に一人が、がんに罹るといわれる昨今、団塊の世代が高齢者グループ（統計上の）に入り、今後終末期医療に関わらざるを得ない人口は急速

に増加していくと予測されている。そのなかで在宅ホスピスケアの実態を伝える絵本の存在感は重要である。



夕日を見つめる夫婦





















